

●モノグラフ
小学生ナウ
Vol. 8-1

わが住む町(地域)

目次

要 約	2
はじめに	4
1. 調査対象地域のプロフィール	5
●校区の概観	5
●地域への定着度	6
2. イメージの中の「わが町」	9
●「わが町」の範囲	9
●「わが町」の構図	14
3. 地域生活の実際	17
●地域における行動	17
●行動半径	22
4. 遊び環境としての地域	24
●遊び場の有無	24
●遊び場の利用率	26
5. 地域への愛着	29
●知っていること	29
●自分の町が好きか	30
●いつまで住みたいか	31
まとめに代えて	33
地球社会の子どもたち ① プロローグ：海外の子どもを訪ねて	35
資料1 調査票見本	40
資料2 学年・性別集計表	47

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
<input type="checkbox"/>	調査レポート	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	わが住む町(地域)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	要約	<input type="checkbox"/>	

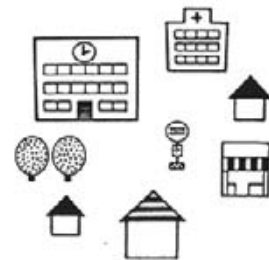
千葉市教育センター 上杉賢士

1. 調査の目的

子どもたちの地域イメージや地域における行動の実際を明らかにし、生活圏としての地域のもつ意味を明らかにする。

2. 「わが町」の広さ

大都市の子どもと農村部の子どもとの間に「わが町」の広さに5倍もの差が認められ、校区の広さに比例している。(表4)



3. 「わが町」のイメージ

農村部の子どもたちは、「わが町」のイメージマップに友だちの家を記入する割合が高く、ヒューマンなイメージを抱いている。(表5)

4. 地域行動の変化

地域での「遊び行動」が最も活発であるのは4年生の男子であるが、次第に「外出行動」へと変質していく。また女子では、「生活行動」が中心であるが、学年が上がると、それも次第にみられなくなる。(表6・7)



●調査概要

1. 調査主題 わが住む町(地域)

2. 調査視点 地域に対するイメージやそこでの行動の実際を探ることを通して、生育環

境としての地域のもつ意味を明らかにする。

3. 調査項目 地域でしていること/行動する範囲/家の近くの遊び場とその利用状況/自分の町を好きか、など。

5

行
む

6

用
こ

8

地
一
り
二
て
ち
る

4.1

5.1

6.1

5. 行動半径の特徴

農村部の子どもたちは徒歩行動圏が広く、電車・バス行動圏が狭かった。これと対照的であったのが団地に住む子どもである。(図13)

6. 身近な遊び場の利用率

身近にある遊び場の利用率のデータからは、フルに利用しようというほど子どもたちの遊びの欲求が高くないことが確認された。(表10)



7. 「わが町」への愛着

自分の町を好きという割合には、地域差が認められなかったが、大都市を除くと結婚してからも、今の所に住みたいとする子どもたちは5～6割であり、「わが町」への愛着が、必ずしも高いとはいえなかった。(図19・20)

8. 提言

都市化の形態としての首都圏近郊(団地校)の母親たちの間では、プライベートなコミュニケーションの輪がかなり形成されていた。それを地域コミュニティ形成の方向に向ける努力によって、都市化の進行の中でも、子どもたちが豊かな「わが町」のイメージを描けるようになるのではなかろうか。



4. 調査時期 昭和62年10月

5. 調査対象 小学4・6年生

6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	346	356	702
6年	411	403	814
計	757	759	1,516



はじめに

子どもの日常生活のエリアは、「学校」「地域」「家庭」の3つに大別することができる。そして近年、生活エリアとしての「学校」が拡大化する一方で、「地域生活」が縮小の一途をたどっていると把握することには、それほど異論はないだろう。

例えば、最近の子どもたちの遊び仲間、同学年・同学級のメンバーが中心となっている。帰宅後、近所に遊び仲間を求めれば、集団は必然的に異年齢の者たちによって構成されることになる。この異年齢集団が崩壊し、同年齢の者たちによる仲間集団が主流を占めるようになったという事実が、端的に「学校」の拡大と「地域」の縮小という変化を物語っている。

その原因として、マスコミュニケーションの発達、都市化の進行、学歴主義の浸透などさまざまな社会的環境の変化が指摘されている。いずれにしても、希薄になったといわれる子どもたちの地域生活の実態を明らかにし、その再生への道を探るという作業は、現代的な教育課題のひとつとして、少なからぬ意味をもとう。

現在、手もとに「地域」をテーマにした2本の調査レポートがある。いずれもモノグラ

フ・小学生ナウ同人によるものであるが、ひとつは「地域社会との絆」（深谷和子・中原、「子どもの価値観」大日本図書刊、所収）であり、もうひとつは、「地域」（深谷昌志・佐々木、『モノグラフ・小学生ナウ』vol. 3-12）である。

「地域社会との絆」では、ミウチ（自分の正体や身分を知ってくれている人々）というキー概念を導入し、地域に住む人々との心理的距離を明らかにしていった。一方、「地域」においては、地域のもつ「遊び環境」としての機能に注目し、地域性の喪失、とりわけ地域が子どもたちにとって、見知らぬ土地となったことを指摘した。

本レポートでは、方法論において、これらの先行研究との重複を避けるために、2つの特徴的なアプローチを採用する。その1は「イメージマップ」の分析であり、その2は「行動半径」を中心として、地域における子どもたちの活動を現象的にとらえようとしたことである。

アプローチの方法を変えて、なお2本の先行研究と共通の根をもつ問題が指摘できるか。それが、本レポートの課題でもある。

1. 調査対象地域のプロフィール



校区の概観

本調査では、居住環境による子どもの地域観の差を、考察の中心的な視点とするため、4地域、7校を調査対象として選定した。それぞれの校区の概観は、次の通りである。

●大都市の2校

東京・世田谷区のほぼ中央に位置するA校は、創立以来約50年を経過する児童数約500名の中規模校である。校区のほぼ半分は、古くからここに居を構え、一戸当たりの敷地が広い、いわゆる高級住宅街で占められている。祖父が所有する敷地内に住居を用意され、そこから学校に通う子どもたちも少なくない。この区域に限って言えば、いわゆる「山の手」の典型的な条件を備えているが、残りの半分は、都営住宅なども含みながら、マンションなどの高層住宅も散見される。

このA校と比較的近い距離にあるB校は、

児童数約600名であり、創立110周年をむかえる。主要道路が校区内を何本も貫き、その道路に沿って商店街が発達している。一部には、A校と同様に高級住宅街をかかえているが、校区の大半は、都営や公団の中層住宅などで占められ、児童の転出入も比較的多い。

●首都圏近郊の2校

千葉県船橋市にあるC校は、それまで農地であった区域を大規模に宅地化した、いわゆるニュータウンの学校である。入居と同時に開校され、ほぼ10年が経過した。保護者の大半は東京方面に職場を有し、典型的なベッドタウンとしての機能を果たしている。周囲にまだ、農地や森・小川などの自然も豊富に残されているが、さらに開発は進む見通しである。

同じ船橋市内にあるD校は、市の北側に位

置し、私鉄沿線に沿うかたちで開けている町にある。しかし、区域の開発年代は江戸時代末期と古く、居住区域としての骨格はほぼ安定している。隣接する学校から約20年前に分離し開校したが、その時期がちょうど首都圏近郊における人口の急増期にあたる。保護者の多くは、やはり都心まで通勤するが、その割合はC校に比較すればやや低い。

●地方都市の1校

地方都市は、一般的に通勤や買い物などによる人の移動が区域内で完結し、独自の経済圏や文化的風土をもっていると考えられる。本調査では、そうした条件を備えている都市として、山梨県甲府市を選定し、市内にあるE校に調査を依頼した。

東京を中心とした首都圏では、中心部における夜間人口の過疎化という大規模なドーナツ化現象が以前から生じているが、この区域でも同様の現象がみられる。市の中心部にある小学校の多くが、児童数300名程度であるのに対して、南部郊外に位置するE校は、現在約800名である。

郊外の農地が約10年前に宅地として造成されると、同時に開校した。したがって、周囲にはまだぶどう畑などが残されているが、専

業農家は極めて少ない。

●農村部の2校

調査依頼や実地踏査などの都合から、調査対象は自ずと関東近県に限定されてしまうが、その範囲内で、純農村を選定するのは困難であった。したがって、本調査でいう「農村部」は、必ずしもそのための条件を十分にはみたしていないかもしれない。

本調査では、千葉県山武郡と長生郡から多少社会的条件の異なる2校を選定した。

F校は創立100年を越え、児童数約700名を数える地域の中心校である。JR線の駅を中心に商店街や民家が広がるが、中心部を除けば、周囲はほとんど農地である。それでも、農業を専業とする保護者は1割弱。さらに商店など自営業の2割を除いた大半は、区域内や千葉市内などに職場を求めている。

G校は、隣接する学校の過大化に伴い、昨年4月に分離、開校したばかりの学校である。農地を宅地化した新しい区画に、郵便局や病院などの公共施設が移転し、同時に学校も新設された。したがって校区域の分割により、G校に通学することになった子どもたちと、他地域から移り住むようになった子どもたちが混在している。児童数は約500名である。

地域への定着度

子どもたちの地域に対する愛着度などを規定する要因として、その地域にどのくらい長く住んでいるかがあげられる。こうして子どもたちの抱く地域観を問題にするのも、都市化に伴う人口の流出入の激しい時代において、子どもたちが、果たして「わが町」というほどにホットな感情を抱き、そこに住む人々に対して、「われわれ意識」を抱けるのかが気がかりだからにはほかならない。

そこで、まず3つの調査データをもとに、それぞれの地域における居住年数を確かめておくことにしよう。

表1は、「今住んでいる所に、いつ頃から住んでいるか」をたずねた結果である。それぞれ地域ごとに特徴的な傾向を示している。まず注目されるのが、首都圏近郊の典型的なベッドタウンであったC校のケースである。生まれたときからそこに住んでいた子どもは約4分の1にすぎず、開校(10年前)と同時に転校してきた子どもが全体の3分の1を占める。

これと対照的に、大都市のA校、農村部のF校では、約半数の子どもが、生まれたときから同じ地域で暮らしている。

そうした地域間の差が認められる一方で、いずれの地域にも共通して「引っ越してきて4年以内」が2割から3割と、あらためて全国的な規模での人口移動の激しさを感じさせられるデータでもある。

次の2つの表は、4つの地域分類内で2校ずつを比較し、それぞれの特徴を明らかにするために用意した。

表2で、農村部に分類されたF校とG校を比較すると、定着度において両者にかかなりの差が読みとれる。特にG校は、行政区画や地理的条件などによる分類上は「農村部」に属するが、移動パターンからすると、むしろ「首都圏近郊」のC校やD校に近い。

同様にして、表3で「大都市」のA校とB校を比較すると、「核家族率」（表の右端、「2人とも一緒に住んでいない」の数値を参照）において、顕著な差が認められる。居住

条件に大きな差はあろうが、数値のみで比較すると、A校の結果は「農村部」のF校に近い。

4つの地域間の比較をするとき、それぞれの地域をどのデータで代表させるかは、非常に難しい。かといって、ここまでみてきたように、異なる条件下にある2校のデータをたして2で割るという方法も、それぞれの地域がもつ特徴を相殺してしまう恐れもある。

こうした事情を考慮して、以下の考察においては主として、B校（大都市）、C校（首都圏近郊＝団地）、E校（地方都市）、F校（農村部）を、それぞれの地域を代表する典型例として比較・検討していく。なお以下に紹介するデータのうち、単純集計のデータや学年別・性別などの比較は、すべて7校分のサンプルを合算したものである。

表1 今住んでいる所に、いつ頃から住んでいるか

(%)

		生まれたときから	10年くらい前から	5～6年前から	引っ越してきて4年以内
大都市	A校	51.2	14.4	14.4	20.0
	B校	41.1	19.6	15.9	23.4
首都圏近郊	C校	23.4	33.9	16.4	26.3
	D校	32.1	23.6	18.1	26.2
地方都市	E校	36.4	14.4	19.3	29.9
農村部	F校	48.4	17.1	13.6	20.9
	G校	31.7	12.4	27.3	28.6

表2 生まれてから、何回引っ越しをしたか

(%)

		1回もしていない	1回	2-3回	4回以上
大都市	A校	48.7	25.0	15.6	10.7
	B校	42.1	28.0	18.7	11.2
首都圏近郊	C校	29.5	33.1	29.5	7.9
	D校	35.3	31.9	27.3	5.5
地方都市	E校	38.8	28.2	22.7	10.3
農村部	F校	55.8	22.9	17.4	3.9
	G校	34.4	25.6	28.1	11.9

表3 祖父母と同居の割合

(%)

		2人とも一緒	おじいさんだけ	おばあさんだけ	2人とも一緒に住んでいない
大都市	A校	21.1	3.7	24.2	51.0
	B校	8.5	2.8	12.3	76.4
首都圏近郊	C校	2.5	2.2	4.7	90.6
	D校	13.5	0.8	7.8	77.9
地方都市	E校	13.3	3.2	13.3	70.2
農村部	F校	27.4	3.5	17.0	52.1
	G校	21.1	2.6	10.5	65.8

2. イメージの中の「わが町」



㊦「わが町」の範囲㊦

今回の調査では、アンケート用紙(B4版)5枚の最後のページの全面を使って、子どもたちに「自分の町」の地図を描いてもらった。「自分の家と学校を書き入れること」以外には、特に条件を与えなかった(詳細は、巻末の調査票見本を参照していただきたい)。

回収できた約1500枚の地図は、当然のことながら縮尺は一定しないし、北を上にして描くという基本的な条件も大半が満たしていない。また、細い路地であっても通学路は広い道路になっているし、くわしく知っている場所は著しく拡大して描かれている。地図としての正確さを要求しない分だけ、子どもたちの抱く「わが町」のイメージが鮮明に表現されているとみることができる。

図1から図8に、各地域の学校から最も平

均的だと思われるものを選んで掲げた。

このイメージマップについて、いくつかの角度から分析を試みた。早速、その結果の報告に入りたい。

表4は、子どもたちの描いたイメージマップがどの範囲までをカバーしているか、言いかえれば、子どもたちのイメージする「わが町」がどのくらいの広さをもっているかを確かめようとしたものである。

記入された公共施設などを手がかりに、市販の2万5千分の1の地図上でイメージマップの対角線の長さを測定し、地域ごとに平均値を算出するという方法をとった。対角線の長さを広さの基準としたのは、子どもたちの描いたマップでは、面積がほとんど正確に表現されていなかったためである。

結果をみると、最長のG校は最短のA校のちょうど5倍もの広さを示している。参考までに、各学校の校区の対角線の長さ、調査

によってえられた通学時間の平均値を示してある。これと対比させてみると、「わが町」の広さは、ほぼ校区の広さに比例しているこ

図1 大都市の子どもの地図1(A校の例)

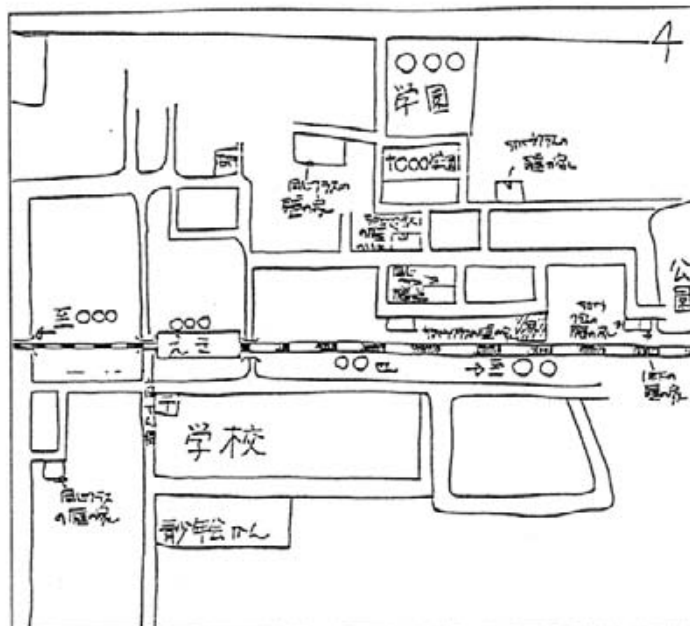
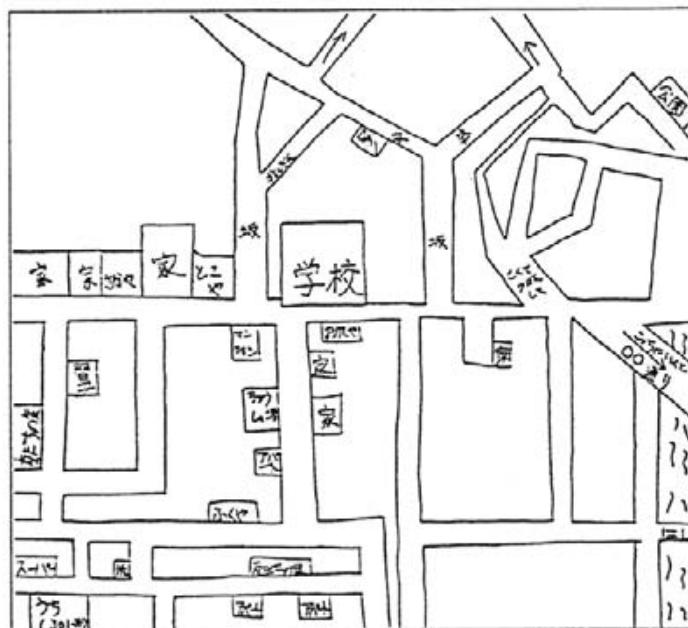


図2 大都市の子どもの地図2(B校の例)



て
」
こ

とがわかる。区域の高度利用がはかられる都市部と、農地に代表されるゆるやかな空間に居住する農村部との間にみられるこれだけの

差は、当然のこととはいえ、子どもたちの「わが町」イメージに少なからぬ影響を与えていることが想像される。

図3 首都圏近郊の子どもの地図1 (C校の例)

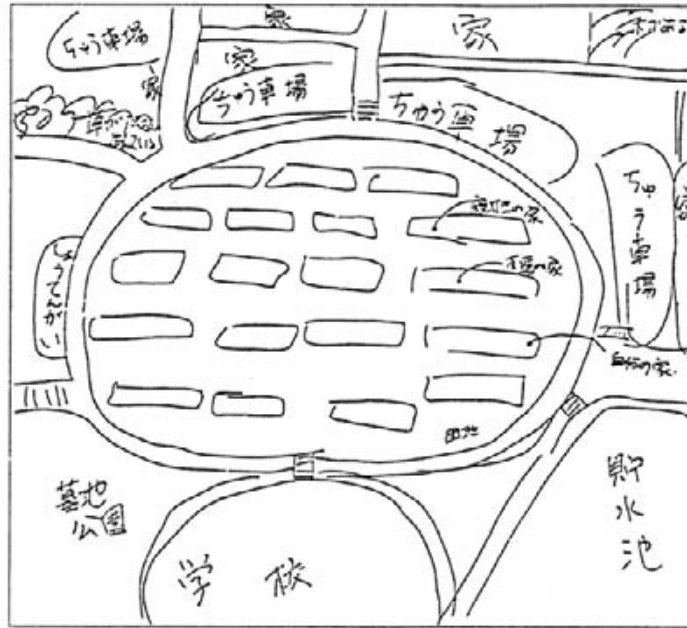


図4 首都圏近郊の子どもの地図2 (D校の例)

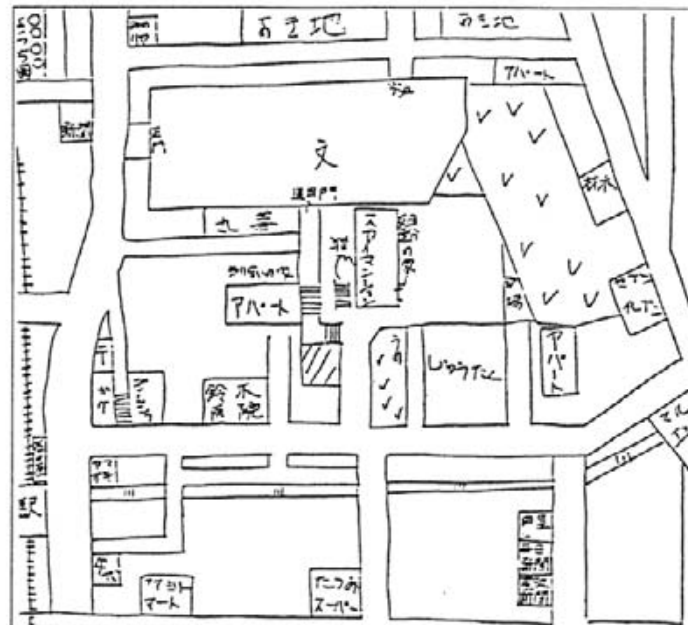


図5 地方都市の子どもの地図1 (E校の例)

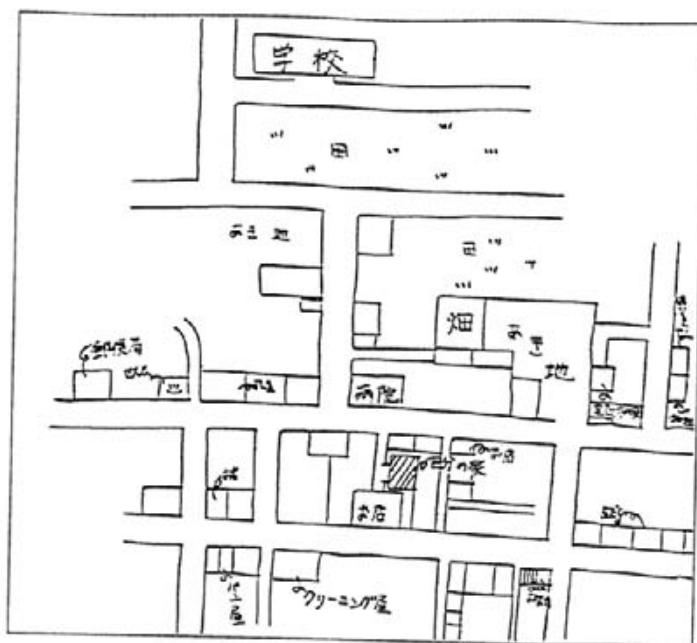


図6 地方都市の子どもの地図2 (E校の例)

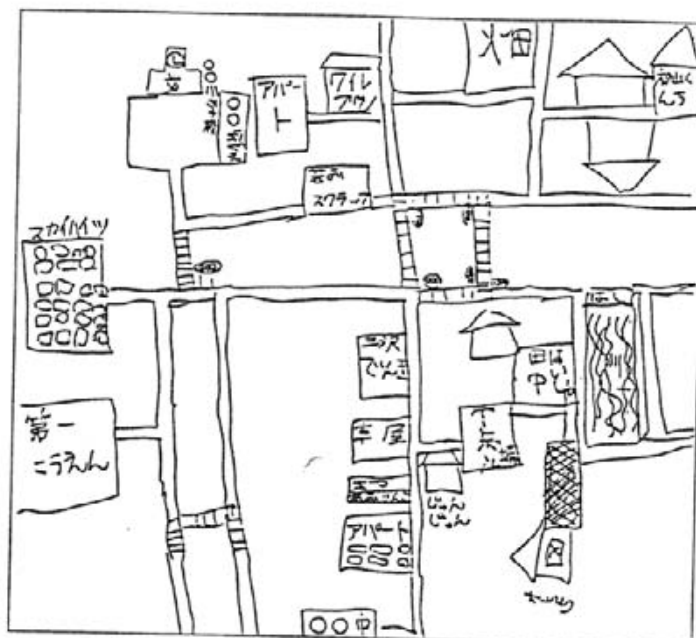


図7 農村部の子どもの地図1 (F校の例)

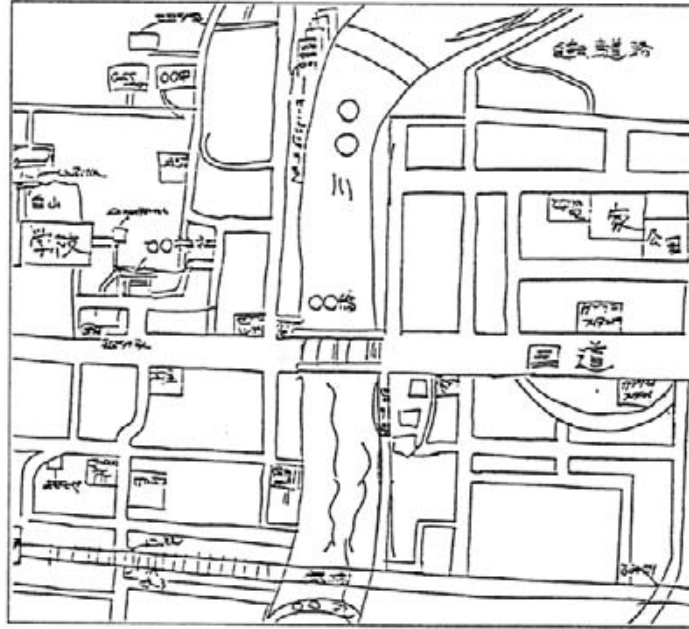


図8 農村部の子どもの地図2 (G校の例)

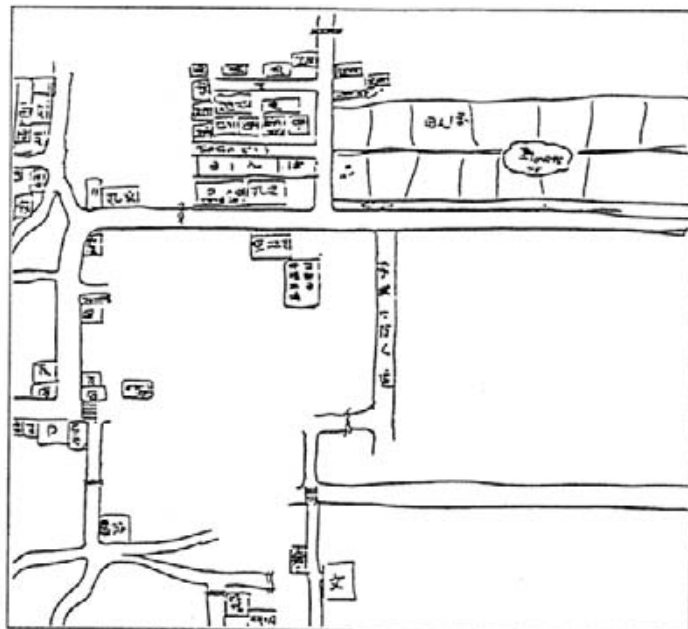


表4 地図に記入された範囲×地域別

		対角線の長さ(m)	参 考	
			校区の対角線(m)	通学時間(分)
大都市	A校	410	1,400	7.6
	B校	580	1,430	12.6
首都圏近郊	C校	700	1,750	9.3
	D校	740	1,920	16.6
地方都市	E校	760	2,700	12.2
農村部	F校	1,900	5,400	21.3
	G校	2,040	4,200	20.4

「わが町」の構図

図9は、ほぼ正方形のマップの画面を9等分し、学校と自宅が描かれた位置を集計した結果である。

まず学校の位置では、農村部の子どもたちがマップの中央に描くのに対して、他の地域では周辺によっている。かつて学校が、地域における文化や情報の発信源として機能していた時代があった。その後、教育の場としての学校や教師の社会的地位が低下してきたことは疑う余地がないが、イメージ中での話とはいえ、農村部では学校がまだ「わが町」の中心に位置していることは大変興味深い。

イメージマップの分析の最後に、地図上に説明のために記入された言葉のカテゴリー分析の結果を紹介しよう。

用意したカテゴリーは、表5に示した通り

「公共施設」から「使途説明」までの5つであるが、注釈を加えたように、それぞれのカテゴリーが含む範囲を多少拡大し、できるだけ全体を網羅するよう配慮した。結果は、表5に掲げた通りである。

子どもたちがイメージマップに記入することがらを分析する作業は、彼らが「わが町」をどのように把握しているかを知る有力な手がかりとなる。限られた紙面の中では、描きたいことの中からいくつかを選択しなければならない。その選択基準が、おそらく「わが町」についてのイメージの質を決定する重要な要因となるのだろう。

そうした角度から、設定した各カテゴリーの意味づけをするなら、そこに人が存在し自分との関係が具体的にイメージされる「友だ

ちの家」は、パーソナルなスケールとしての意味をもつであろう。この対極には、「公共施設」「駅・バス停」「使途説明」などがインパーソナルなスケールとして位置づく。大都市と地方都市で記入率の高かった「商店」は、その性格によって、両方の意味をもつ。大型のスーパーマーケットなどでは、店員と客との人間的なふれあいはあまり期待できそうにないし、かつての「駄菓子屋」がもつ雰囲気の中では、むしろ人間的な交流のほうにウエイトがある。

そうした意味づけを前提としながら、あら

ためて表5に注目すると、都市化の進行に伴う問題の所在が鮮明になる。

都市化という現象は、同時に居住空間の質的向上や機能性の向上をも実現させた。しかし、交通網の発達にしる公共施設や居住条件の整備・改善にしる、その多くは主としておとなの生活を想定している。

しかし、子どもが育つ環境として地域に必要なものは別であろう。少なくとも、「わが町」のイメージの中に、ヒューマンなふれあいを感じることはできるか。その一点を決して軽視してはならないだろう。

図9 地図に記入された学校と自宅の位置

	学校	自宅																		
大都市	<table border="1"> <tr><td>14</td><td>24</td><td>14</td></tr> <tr><td>10</td><td>13</td><td>7</td></tr> <tr><td>7</td><td>6</td><td>5</td></tr> </table>	14	24	14	10	13	7	7	6	5	<table border="1"> <tr><td>8</td><td>12</td><td>7</td></tr> <tr><td>16</td><td>10</td><td>18</td></tr> <tr><td>7</td><td>12</td><td>10</td></tr> </table>	8	12	7	16	10	18	7	12	10
14	24	14																		
10	13	7																		
7	6	5																		
8	12	7																		
16	10	18																		
7	12	10																		
首都圏近郊	<table border="1"> <tr><td>12</td><td>17</td><td>13</td></tr> <tr><td>4</td><td>5</td><td>5</td></tr> <tr><td>11</td><td>21</td><td>12</td></tr> </table>	12	17	13	4	5	5	11	21	12	<table border="1"> <tr><td>12</td><td>14</td><td>5</td></tr> <tr><td>10</td><td>16</td><td>12</td></tr> <tr><td>5</td><td>13</td><td>13</td></tr> </table>	12	14	5	10	16	12	5	13	13
12	17	13																		
4	5	5																		
11	21	12																		
12	14	5																		
10	16	12																		
5	13	13																		
地方都市	<table border="1"> <tr><td>15</td><td>41</td><td>10</td></tr> <tr><td>4</td><td>9</td><td>1</td></tr> <tr><td>9</td><td>8</td><td>3</td></tr> </table>	15	41	10	4	9	1	9	8	3	<table border="1"> <tr><td>7</td><td>6</td><td>7</td></tr> <tr><td>8</td><td>10</td><td>5</td></tr> <tr><td>25</td><td>20</td><td>12</td></tr> </table>	7	6	7	8	10	5	25	20	12
15	41	10																		
4	9	1																		
9	8	3																		
7	6	7																		
8	10	5																		
25	20	12																		
農村部	<table border="1"> <tr><td>15</td><td>17</td><td>7</td></tr> <tr><td>9</td><td>29</td><td>7</td></tr> <tr><td>7</td><td>6</td><td>3</td></tr> </table>	15	17	7	9	29	7	7	6	3	<table border="1"> <tr><td>8</td><td>12</td><td>8</td></tr> <tr><td>8</td><td>18</td><td>13</td></tr> <tr><td>9</td><td>13</td><td>11</td></tr> </table>	8	12	8	8	18	13	9	13	11
15	17	7																		
9	29	7																		
7	6	3																		
8	12	8																		
8	18	13																		
9	13	11																		

※各地域ごとに100サンプルを抽出したため、数値は%と同義である。

○は最大値

表5 地図に記入された文字情報のカテゴリー分析

	公共施設	商店	友だちの家	駅・バス停	使途説明	その他	1人当たりの 総情報量 (%)
大都市	14.6	34.3	19.5	14.2	11.7	5.7	12.1
首都圏近郊	23.6	26.8	12.9	4.5	30.4	1.8	16.6
地方都市	16.2	34.3	12.0	3.8	32.3	1.4	11.0
農村部	20.8	25.0	25.4	13.9	9.3	5.6	12.4

※各カテゴリーには、次のものを含めた

〔公共施設〕 交番・銀行・公園・病院・他の学校など

〔友だちの家〕 親戚の家・となりの家・知りあいの家など

〔駅・バス停〕 線路名・踏切・道路名・橋・川など

〔使途説明〕 アパート・マンション・商店街・田畑・団地・駐車場など

3. 地域生活の実際



地域における行動

前章では、イメージマップの分析を中心に、子どもたちの描く「わが町」の輪郭を明らかにしてきた。それでは、その「わが町」の中で、子どもたちはどのように生活しているのだろうか。本章では、アンケート調査の結果をもとに、子どもたちの地域生活の具体的なようすを探ることにする。

まず用意した20項目について、それぞれどのくらいしているかをたずねた結果を、図10に掲げた。結果は、いずれの項目においても、「毎日のようにする」という子どもが極めて低率で、作図するのが困難であった。「わりとする」を加えても、せいぜい3割から4割にとどまっており、子どもたちの地域生活は予想以上に貧弱であった。

そこで、「たまにする」も加えた数値を基準にして、表6には性別・学年別の結果を整

理してみた。

各項目ごとの最大値と最小値を手がかりにして、行動の特徴を読みとってみよう。

4年生の男子に高率である項目は、「4. 近所のお家に遊びに行く」「8. 暗くなるまで外で遊ぶ」などの6項目で、それらのいずれもが、6年生の女子で最低率を示している。つまり男子が優位で、学年が上がると数値が低下するという特徴をもつ項目群である。

次にやはり男子優位であるが、学年が上がるとともに数値が上昇する項目は、「5. 本を買いに行く」「7. 自転車で遠くまで行く」などの計5項目である。

このようにして、表6の結果を性別・学年別推移の特徴によって整理したのが、次の表7である。そして表に示したように、それぞれの類型に属する項目群の特徴を、「遊び行

図10 地域における行動

(%)

	毎日のように する	わりと する	たまに する	ほとんど しない
1. 近くのお祭りに行く	41.3		40.0	18.7
2. おつかいをする	31.5		47.5	21.0
3. 家の人と食事に行く	17.1		60.7	22.2
4. 近所の家に遊びに行く	39.8		37.8	22.4
5. 本を買いに行く	30.2		46.5	23.3
6. おもちゃや文房具を買いに行く	19.0		57.7	23.3
7. 自転車で遠くまで行く	23.4		45.4	31.2
8. 暗くなるまで外で遊ぶ	26.1		41.9	32.0
9. デパートに買い物に行く	15.1		45.7	39.2
10. 30分くらい歩く	24.5		35.4	40.1
11. 近くの公園で遊ぶ	17.9		40.2	41.9
12. 図書館で本を借りる	19.7		35.5	44.8
13. 電車やバスに乗る	19.8		33.6	46.6
14. 友だちと道で遊ぶ	13.3		39.5	47.2
15. 映画を見に行く	5.9	33.4		60.7
16. 近くのグラウンドで遊ぶ	10.1	21.3		68.6
17. 帰ってから学校に遊びに行く	7.3	22.5		70.2
18. 犬などの散歩をさせる	13.1	11.6		75.3
19. 近くの道を掃除する	2.4	20.3		77.3
20. ゲームセンターで遊ぶ	8.7		89.7	

1.6

表6 地域における行動×性別・学年別

	男 子		女 子	
	4 年	6 年	4 年	6 年
1. 近くのお祭りに行く	83.8	78.9	86.2	77.1
2. おつかいをする	72.3	<u>70.5</u>	(87.0)	86.4
3. 家の人と食事に行く	76.9	78.0	77.2	78.8
4. 近所の家に遊びに行く	(84.9)	75.1	80.1	<u>71.5</u>
5. 本を買いに行く	72.5	(82.6)	<u>68.2</u>	82.0
6. おもちゃや文房具を買いに行く	75.4	76.3	77.2	77.6
7. 自転車で遠くまで行く	78.6	(80.5)	<u>50.6</u>	64.4
8. 暗くなるまで外で遊ぶ	(83.0)	78.9	58.1	<u>52.6</u>
9. デパートに買い物に行く	62.2	<u>51.5</u>	61.5	(68.5)
10. 30分くらい歩く	61.8	58.9	(66.7)	<u>53.2</u>
11. 近くの公園で遊ぶ	(71.5)	49.4	(71.5)	<u>43.5</u>
12. 図書館で本を借りる	51.9	<u>39.0</u>	(70.8)	60.6
13. 電車やバスに乗る	<u>46.4</u>	(57.1)	53.8	55.4
14. 友だちと道で遊ぶ	(63.6)	54.7	50.6	<u>43.7</u>
15. 映画を見に行く	41.6	(45.8)	<u>31.2</u>	37.3
16. 近くのグラウンドで遊ぶ	(44.9)	41.4	25.6	<u>15.1</u>
17. 帰ってから学校に遊びに行く	(35.8)	30.9	33.5	<u>20.0</u>
18. 犬などの散歩をさせる人の家	25.4	24.5	24.6	24.4
19. 近くの道を掃除する人の家	19.3	<u>13.7</u>	(34.7)	24.0
20. ゲームセンターで遊ぶ人の家	18.7	(19.0)	2.3	<u>1.0</u>

「ほとんどしない」を除く割合

動」「外出行動」「生活行動」とネーミングしてみた。

「遊び行動」においては、男子が活発であるが、学年が上がるにつれて影をひそめる。そして「15.映画を見に行く」に象徴される「外出行動」が、これにかわって高率となる。

一方、「生活行動」は女子に特徴的であるが、やはり学年が上がるにつれてあまりみられなくなり、それにかわる行動は見当たらない。いずれにしても全体としては、遊びや生活の場としての地域の意味は、学年の上昇とともに次第に薄れていく傾向にある。

次に、表8で地域別に比較してみよう。意外にも、「遊び行動」において高率を示すの

は、都市化の進行が最も著しいと思われる「大都市」と「首都圏近郊」の子どもたちであった。そして「地方都市」の子どもたちは「生活行動」に特徴をみせる。

「わが町」のイメージを豊かに描いていたはずの「農村部」の子どもたちが高率を示すのは、「本を買いに行く」「ゲームセンターで遊ぶ」の「外出行動」に分類される2項目のみであった。

どうやら子どもたちの地域行動は、遊び場の有無や広さといった居住空間がもつ物理的条件とは別の要因によって規定されているようである。

表7 地域での行動の種類

男子>女子、4年>6年	遊び行動	女子>男子、4年>6年	生活行動
4. 近所の家に遊びに行く		2. おつかいをする	
8. 暗くなるまで外で遊ぶ		12. 図書館で本を借りる	
11. 近くの公園で遊ぶ		19. 近くの道を掃除する	
14. 友だちと道で遊ぶ			
16. 近くのグラウンドで遊ぶ			
17. 帰ってから学校に遊びに行く			
男子>女子、6年>4年	外出行動	差がない項目	
5. 本を買いに行く		1. 近くのお祭りに行く	
7. 自転車で遠くまで行く		3. 家の人と食事に行く	
15. 映画を見に行く		6. おもちゃや文房具を買いに行く	
20. ゲームセンターで遊ぶ		18. 犬などの散歩をさせる	

表8 地域における行動×地域別

(%)

		大都市 (B校)	首都圏近郊 (C校)	地方都市 (E校)	農村部 (F校)
遊 び 行 動	1. 近所の家に遊びに行く	76.9	86.4	71.1	73.8
	2. 暗くなるまで外で遊ぶ	76.6	70.4	65.6	68.5
	3. 近くの公園で遊ぶ	75.0	65.6	67.8	43.8
	4. 友だちと道で遊ぶ	50.9	70.3	40.1	43.2
	5. 近くのグラウンドで遊ぶ	30.2	35.8	31.9	29.6
	6. 帰ってから学校に遊びに行く	60.7	34.5	32.2	28.6
生 活 行 動	1. おつかいをする	70.4	81.1	81.7	72.3
	2. 図書館で本を借りる	58.2	52.7	59.2	32.7
	3. 近くの道を掃除する	13.9	23.6	27.5	15.4
外 出 行 動	1. 本を買いに行く	64.2	75.5	78.0	78.8
	2. 自転車で遠くまで行く	62.6	73.7	75.2	63.0
	3. 映画を見に行く	31.5	37.7	44.8	30.9
	4. ゲームセンターで遊ぶ	11.1	9.8	3.3	24.3

「わりと・毎日のようにする」割合 ○は最大値
 ～は最小値

行動半径

次に日常的な行動の範囲が、どのくらいの広さをもっているかに注目してみよう。

図11は「ふだん、あなたが家に帰ってからわりとよく行くところで、歩いていちばん遠いのは、家から何分くらいの所ですか」という問いによって得られた結果である。同様に

して、図12は自転車による行動半径を示した。

各地域ごとにかかなりの差が認められるが、その関係をわかりやすく図示したのが、次の図13である。なお「電車・バス圏」については、無回答がかなりの数にのぼった。日常的

に電車
ちもい
平均値
結果
「農村部」
都市」
あつ
「農村
が広
的狭
の子
狭く、
た

図11 徒歩行動圏の広さ×地域別

(%)

	1-5分	6-10分	11-15分	16-20分	21分以上
大都市 (B校)	24.2	26.2	18.2	16.2	15.2
首都圏近郊(C校)	33.2		27.8	18.3	10.4 10.3
地方都市 (E校)	31.3		28.4	14.4 11.0	14.9
農村部 (F校)	28.4	19.9	18.7	13.3	19.7

図12 自転車行動圏の広さ×地域別

(%)

	1-5分	6-10分	11-15分	16-20分	21分以上
大都市 (B校)	21.6	32.9		26.1 6.8	12.6
首都圏近郊(C校)	35.3		24.8	16.6 14.5	8.8
地方都市 (E校)	23.5		32.3	14.9 10.3	19.0
農村部 (F校)	35.9		28.2	15.8 9.0	11.1

に電車やバスを利用することがない子どもたちもいるので、便宜的に無回答は0分として平均値を算出してある。

結果は、「徒歩行動圏」が最も広いのが「農村部」の子ども、以下「自転車圏」は「地方都市」、「電車・バス圏」は「首都圏近郊」であった。各地域ごとに特徴をまとめると、「農村部」の子どもたちは、「徒歩行動圏」が広く、「自転車圏」「電車・バス圏」が比較的狭い。これとは対照的に、「首都圏近郊」の子どもたちは、「徒歩圏」が4地域中最も狭く、「電車・バス圏」は逆に最も広い。

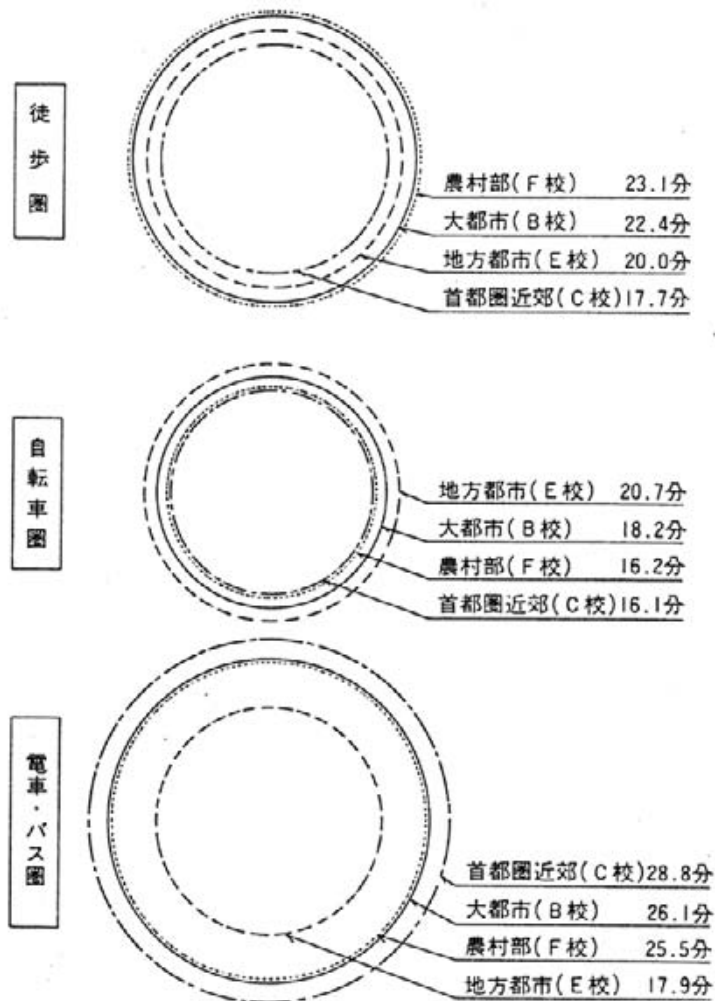
たとえそれが通学という事情によるもので

あったとしても、農村部の子どもたちは、自分の足で「わが町」の姿を確かめていることが想像される。これに対して、「首都圏近郊(=団地)」に住む子どもたちは、電車やバスを利用し、ワーブして見知らぬ土地にまで行動半径を拡大させている。

子どもたちにとっては、自分の目で見つめ、耳で聞き、足で歩くという実体験を伴う世界こそが地域としての意味をもつはずである。ここで読みとってきた行動半径の特徴が、「わが町」のイメージに、少なからぬ影響を及ぼしていることが十分想像できる。

示し
が、
大の
ハて
常的

図13 行動半径の広さ×地域別



4. 遊び環境としての地域



子ども
遊べる
グラウ
川・森・
基地遊
こがて
ゲーム
デパー

遊び場の有無

次に、子ども時代を特徴づける遊びとの関連で、地域環境と子どもとの関わりを探ってみよう。

建築家であり、長年子どもの遊び場のデザインに取り組んでいる仙田満氏は、子どもの遊び空間を、そこで生じる遊びの質をも考慮しながら、「自然スペース」「オープンスペース」「道スペース」「アナーキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」の6つに分類している（『子どものあそび環境』筑摩書房、1984）。

ここでは、その分類をもとにしながら、さらに都市化の進行に伴う地域環境の変化をも考慮して、図14に示したような7つのスペースを設定した。そして、それらが家の近くにあるかどうかをたずねた結果が、図14である。「少し遠い所にある」までを含めると、子ど

もたちの身近に、遊びのためのスペースはかなり用意されている。しかしここに示した数値は、実際に存在するかどうかではなく、子どもたちがその存在に気づき、遊びスペースとして認知しているかどうかを示す。

それを前提に、性別・学年別に示した表9をみると興味深い。彼らを取り巻く居住空間には差がないはずであるにもかかわらず、公園や道路が身近にあると回答する割合は、4年生の女子が最も高い。そして4年生の男子は、「グラウンド」や「川・森・畑などの自然」「基地遊びのできる所」などのワイルドな遊びのためのスペースの存在を認めているし、6年生の男子は、「ゲームセンター」や「デパート」などの都市スペースが身近に存在するという。

そのいずれもが、彼らの地域における遊び行動の特徴を如実に反映した結果と言えよう。

図14 家の近くにある遊び場

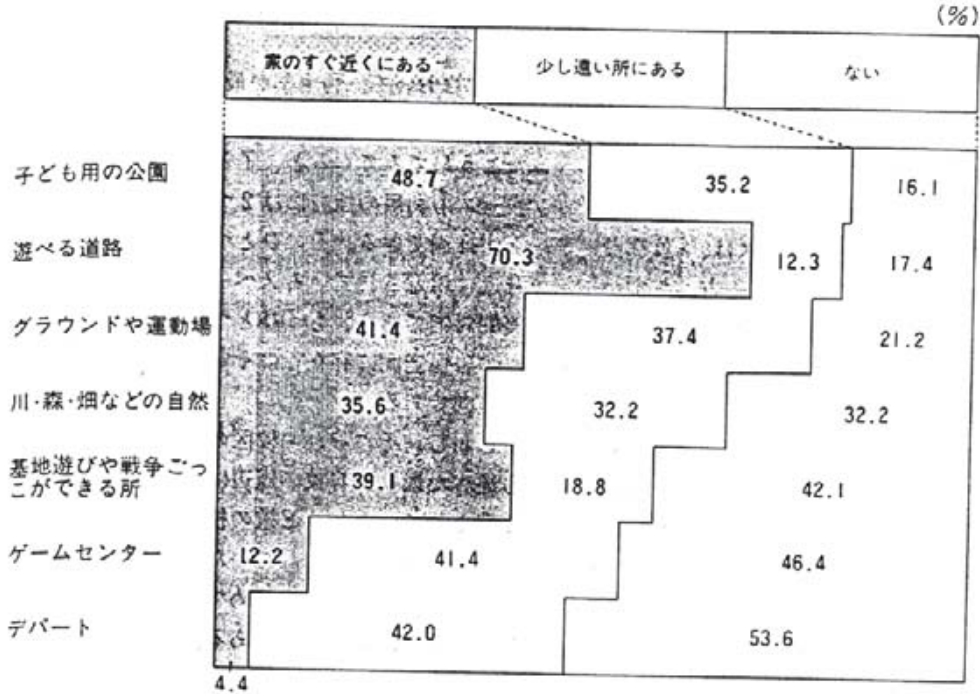


表9 家の近くにある遊び場×性別・学年別

(%)

	男 子		女 子	
	4 年	6 年	4 年	6 年
1. 子ども用の公園	85.3	80.7	87.0	83.3
2. 遊べる道路	81.7	77.5	87.9	84.0
3. グラウンドや運動場	86.9	80.6	75.7	72.9
4. 川・森・畑などの自然	76.7	65.5	68.3	62.1
5. 基地遊びや戦争ごっこができる所	68.8	58.5	56.6	49.0
6. ゲームセンター	61.4	63.4	40.3	48.4
7. デパート	49.7	52.2	44.8	38.8

「少し遠い所・家のすぐ近くにある」割合 ○は最大値、〰は最小値

はか
た数
、子
一ス

表9
空間
、公
、4
男子
自然」
遊び
6年
ート」
う。
遊び
よう。

遊び場の利用率

次に、身近な遊びスペースの有無に、その利用率を加えて、地域ごとに比較してみよう。

図15から図18までに、地域ごとの遊びスペースの有無を掲げた。公園・道路・グラウンドなどの人工的な遊びスペースは、「首都圏近郊」が最も整備されている。一方、さすがに「自然スペース」や「基地スペース」は、「農村部」に多い。

図の右端に示した利用率のみを取り出して、地域別に比較したのが、次の表10である。結果をみると、「公園」に代表される人工的なスペースでは、それらが最も整備されている「首都圏近郊」の子どもの利用率はさすがに高率を示している。その一方で、「グラウンド」や「自然」などのスペースに乏しいはずの「大都市」の子どもに利用率が高い。さらに「ゲームセンター」や「デパート」などの都市ス

ペースにおいて、利用率が最も高いのは、「農村部」の子どもたちである。

こうしてみると、子どもたちの遊びスペースの利用の仕方には2つの意味があることが推測できる。そのひとつは、とりえず身近に用意されているスペースを利用する現実的対応であり、もうひとつは逆に、それぞれの居住空間に存在しにくいスペースを求める方向である。

しかし、それぞれの校区のプロフィールでも述べた通り、C校の周辺にはまだ自然が多く残されていたし、E校の校区内には広い公園がいくつも用意されていた。にもかかわらず、それらの利用率は極めて低い。子どもたちの遊び欲求は、身近にある遊びスペースをフルに利用するというほどには、高くないのであろう。

図15 家の近くにある遊び場と利用率(大都市・B校)

	あ る			家の近くにはない	利用率 (%)
	よくときどき遊ぶ	ほとんど遊ばない			
子ども用の公園	43.9	39.3	16.8	52.8	
遊べる道路	42.1	28.9	29.0	59.3	
グラウンドや運動場	58.9	20.5	20.6	74.2	
川・森・畑などの自然	24.3	15.0	60.7	61.8	
基地遊びや戦争ごっこができる所	14.0	35.5	50.5	28.3	
ゲームセンター	6.6	40.1	53.3	14.1	
デパート	18.7	41.1	40.2	31.3	

図16 家の近くにある遊び場と利用率(首都圏近郊・C校)

(%)

	あ る		家の近くにはない	利用率
	よく・ときどき遊ぶ	ほとんど遊ばない		
子ども用の公園	55.6	38.2	6.2	59.3
遊べる道路	56.3	32.4	11.3	63.5
グラウンドや運動場	52.1	38.0	9.9	57.8
川・森・畑などの自然	28.2	44.3	27.5	38.9
基地遊びや戦争ごっこができる所	21.6	52.0	26.4	29.3
ゲームセンター	7.0	43.7	49.3	13.8
デパート	8.3	33.2	58.5	20.0

図17 家の近くにある遊び場と利用率(地方都市・E校)

(%)

	あ る		家の近くにはない	利用率
	よく・ときどき遊ぶ	ほとんど遊ばない		
子ども用の公園	42.4	40.1	17.5	51.4
遊べる道路	57.1	30.0	12.9	65.6
グラウンドや運動場	55.9	26.3	17.8	68.0
川・森・畑などの自然	26.4	40.8	32.8	39.3
基地遊びや戦争ごっこができる所	18.1	40.7	41.2	30.8
ゲームセンター	2.0	30.4	67.6	6.2
デパート	10.7	23.1	66.2	31.7

図18 家の近くにある遊び場と利用率(農村部・F校)

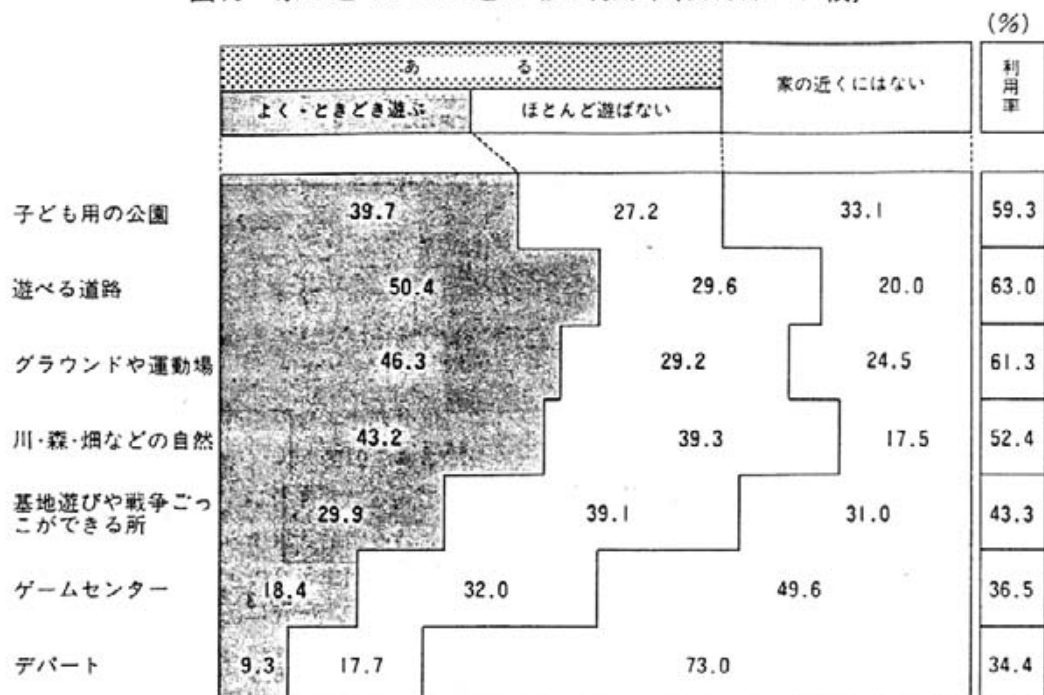


表10 家の近くにある遊び場の利用率×地域別

	子ども用の公園	遊べる道路	グラウンドや運動場	川・森・畑などの自然	基地遊びや戦争ごっこができる所	ゲームセンター	デパート
大都市(B校)	52.8	59.3	74.2	61.8	28.3	14.1	31.3
首都圏近郊(C校)	59.3	63.5	57.8	38.9	29.3	13.8	20.0
地方都市(E校)	51.4	65.6	68.0	39.3	30.8	6.2	31.7
農村部(F校)	59.3	63.0	61.3	52.4	43.3	36.5	34.4

よく・ときどき遊ぶ ① ほとんど遊ばない ② 家の近くにはない ③

数値は上のスケールで $\frac{\text{①}}{\text{①} + \text{②}}$ (%)

○は最大値、〰は最小値

5. 地域への愛着



知っていること

最後に、ここまでのデータが明らかにしてきた子どもたちの地域生活のようすが、「わが町」に対する愛着とどう関わっているかを明らかにしておきたい。

まず表11は、「自分の町をどのくらい知っているか」を、地域別に整理した結果である。

全体として、最もよく「わが町」を知っているのは「農村部」の子どもたちである。彼らが、他地域の子どもたちに比べて際立って

高率を示すのは、「町役場の場所や道順」「町長さんの名前」など、主として「わが町」の構造に関することからではあるが、イメージマップにはヒューマンなふれあいも色濃く表現されていた。こうした条件を総合すれば、「農村部」で暮らす子どもたちが、最も豊かに「わが町」のイメージを描いていると考えてもさしつかえなからう。

表11 自分の町について知っていること×地域別

(%)

	大都市 (B校)	首都圏近郊 (C校)	地方都市 (E校)	農村部 (F校)
1. スーパーマーケットがある所	85.9	87.2	92.2	87.6
2. 病院がある所	79.1	75.2	79.1	76.4
3. となりの小学校がある所	45.8	72.1	69.8	55.4
4. となりの家族の人数	52.8	77.3	66.2	60.1
5. 警察や交番がある所	75.7	66.6	46.8	83.0
6. 市役所や町役場がある所	39.6	38.6	46.8	79.9
7. 市役所や町役場までの道順	27.1	38.3	37.0	67.8
8. 市長(区長・町長)さんの名前	10.3	22.8	31.1	51.5
9. となりの家のおじさんの仕事	19.8	21.0	32.7	32.1
10. 担任の先生の家がある所	15.9	14.9	14.6	12.0

「知りたい・よく知っている」割合

自分の町が好きか

しかし次の表12によると、ここまで読みとってきたいくつかの地域差も、「あなたは自分の住んでいる町が好きですか」という直接的な問いには、ほとんど反映されていない。いずれの地域に住む子どもたちも、「わが町」に対する愛着をかなり強く抱いているという結果には、一面ではホッとさせられる。

「農村部」に住む子どもたちが提供してくれたデータに、ヒューマンで豊かなイメージ

を感じとったのは、あるいは失われたものに対するおとなの郷愁が先行しすぎていたからなのかもしれない。彼らは、「デパート」や「ゲームセンター」の利用率で示したように、むしろ都市的・文化的なものに強いあこがれを抱いているのかもしれない。

念のため図19に、性別・学年別に集計した結果を掲げたが、地域への愛着は、むしろ発達という要因によって強く規定されている。



に
し
ら
に

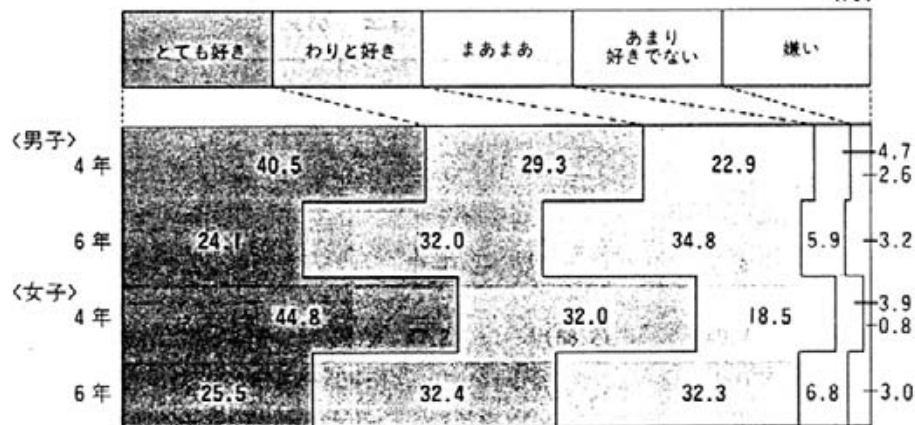
表12 自分の町が好きか×地域別

(%)

	とても好き	わりと好き	まあまあ	あまり好きでない	嫌い
大都市(B校)	38.5	26.9	25.0	5.8	3.8
	65.4			9.6	
首都圏近郊(C校)	29.1	35.3	26.9	6.5	2.2
	64.4			8.7	
地方都市(E校)	33.8	31.8	26.9	6.5	1.0
	65.6			7.5	
農 村 部(F校)	34.1	34.1	27.1	3.1	1.6
	68.2			4.7	

図19 自分の町が好きか×性別・学年別

(%)



いつまで住みたいか

図20は地域への愛着度を、「いつまでそこに住みたいか」という視点からとらえようとした結果である。

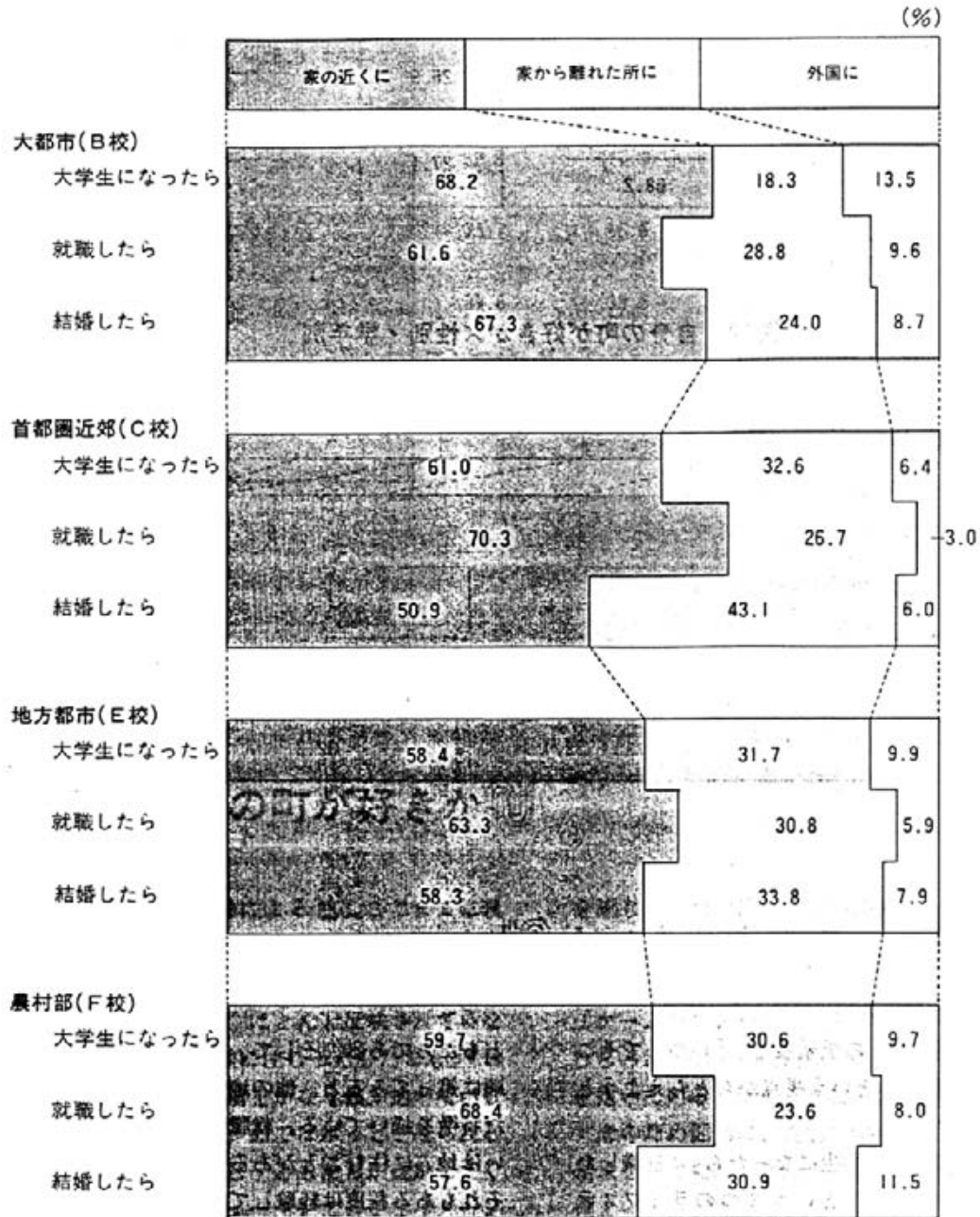
ここでは、「大学生になったら」「就職したら」「結婚したら」という3つのライフステージを設定したが、全体として最も「わが町」に住み続けたいとしたのは、「大都市」の子

どもたちである。そして、ライフステージを順に追ってみると、他の地域と異なる際立った特徴を描いている。就職する頃には、あるいは地方に住むことがあるかも知れないが、それもある程度は経験してみたい。でも結婚して、自分の暮らしを営むためには、やはり、今住んでいる町に戻ってきたいというのであ

る。これと対照的に、他のいずれの地域に住む子どもたちも、できることなら定住する場所は他に求めたいと、脱出願望を抱いている。子どもたちが居住空間に求めているのは、

必ずしもヒューマンなふれあいではなく、便利さや快適さなのかもしれない。そしてそれは、都市化を進行させたおとなたちの望んだ方向と、ほぼ一致するのだろう。

図20 将来どこに住みたいか×地域別



い
環
境
と
な
か
か
つ
て
こ
こ
に
ま
る

まとめに代えて

いうまでもなく、子どもたちに現在の地域環境を提供したのはおとなである。そしておとなの誰もが、子どもたちには少なからず豊かな「わが町」のイメージを抱かせたいと願ってきたはずである。

そこで、現在の居住環境におけるおとな(=母親)たちの行動を手がかりにして、子どもの生活圏としての地域再生への道を探ることで、本レポートのまとめとしたい。

表13は、子どもからみた母親の地域活動の

ようすである。

「首都圏近郊(=団地)」に住む母親たちは、意外にも多くの項目において高率を示している。しかし、その内容を細かくみると、近所の人との立ち話や家でのおしゃべりなど、私的なコミュニケーションに限定されている。これと対照的に「農村部」の母親たちは、PTAや子ども会など、なかば公的な活動における実行率が高い。

この傾向は、表14にみられるように、同じ

表13 母親の地域活動×地域別

	大都市 (B校)	首都圏近郊 (C校)	地方都市 (E校)	農村部 (F校)
1. 近所の人と立ち話をする	60.2	79.5	59.7	66.8
2. 近所の人と家でおしゃべりをする	57.4	74.7	61.8	61.0
3. 料理を近所に持って行く	47.2	58.2	49.7	45.9
4. 近所の人と買い物に行く	39.8	53.5	40.3	36.6
5. PTAの仕事をする	43.0	32.1	37.4	48.8
6. 近所の家に遊びに行く	37.4	55.1	32.1	30.2
7. 子ども会などの世話をする	22.2	16.9	28.4	61.1
8. 町内会などの仕事をする	27.8	39.6	39.1	36.2
9. 講演会や習い事に行く	23.4	34.1	24.3	26.8
10. 近所のお年寄りの世話をする	24.3	11.8	25.5	23.8
11. 近所の人とスポーツをする	24.1	27.0	21.3	13.2

「ほとんどしない」を除く割合 ○は最大値、～は最小値

「農村部」に属するとはいえ、古くからの地域を校区とするF校と、新しく開発され新住民が多いG校との比較においてもあてはまる。

人と人とのつながりが希薄だと思われがちな団地において、たとえそれがプライベートなつきあいであるとは言え、かなりの高率であることは特筆に値しよう。そしてそれは、見知らぬ隣人とも接触を保ちながら、現在の地域生活に安心感を得ようとする母親たちの努力の結果でもあろう。その私的なコミュニケーションのいくらかを、地域の子どもたちを共同で育てるというコミュニティ形成の方向にむけられないだろうか。そうした方向に子どもたちをも巻き込みながら、豊かに「わ

が町」のイメージを抱かせていくのもまた、おとなの責任であろう。

本調査で対象とした4つの地域は、都市化の進行という現象の中では、時系列的な変化の段階的な形態と考えることもできる。豊かな「わが町」のイメージを描いていた「農村部」の子どもたちも、10年後、20年後には、「公共施設」と「使途説明」が中心となったイメージマップを描くようになるかもしれない。

とすれば、ヒューマンなふれあいにみちた人間的環境をつくり、子どもたちに確かな「われわれ意識」や「コミュニティ感情」を抱かせる町づくりに努力するのは、おとなに課せられた大きな課題である。

表14 母親の地域活動 — 農村部のF校とG校の比較 —

(%)

	F 校	G 校
1. 近所の人と立ち話をする	66.8	62.7
2. 近所の人と家でおしゃべりをする	61.0	66.5
3. 料理を近所に持って行く	45.9	55.9
4. 近所の人と買い物に行く	36.6	42.0
5. PTAの仕事をする	48.8	37.9
6. 近所の家に遊びに行く	30.2	37.5
7. 子ども会などの世話をする	61.1	30.2
8. 町内会などの仕事をする	36.2	18.0
9. 講演会や習い事に行く	26.8	28.5
10. 近所のお年寄りの世話をする	23.8	15.5
11. 近所の人とスポーツをする	13.2	12.1

「ほとんどしない」を除く割合

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

地
漁
いる
年に
子と
耳を
その
子
する
査に
ども
東
いた
ども
し
しき
比へ
りま
ちの
と人
并
か言